

琵琶説法

口上

釈迦牟尼仏の説きおきたまえるみ教えと、そのお覚りの顛末を、語りまするは俄か仕立ての琵琶法師、「愚凡釈と」と申します。

鳴り物入りの説法と時代遅れの七五調、非難の向きもあるうけれども、ご法義だけでは固すぎる。「あんたの話しは難しい」、言われ続けて三十年、何か手立てはないものか、思案の末の琵琶法師、意のあるところを汲み取って、どうかご容赦頂いて、ご聴聞かたよろしく願います。



薩摩琵琶を改造しております。調弦も九州地域で活躍した琵琶法師が用いたものによっております。その特徴として高音の四の糸と三の糸とは同じ高さです。なお、全体の調弦の高さも自分の声の高さに合わせて低めです。

語りましたる一段は、……物語、続きの段は何れまた、次のご縁と致しましょう。

さてお終いに、言わずもがなのことながら、御聴聞たまわりました上からは、拍手喝采勿論のこと、念仏申して下されば、俄か仕立ての琵琶法師、これに過ぎたる果報なし、これに過ぎたる果報なし。

口上に述べましたように、琵琶説法を試みております。平家琵琶でお馴染みの吟詠調では説法には向かないように思われましたので、「今様」風の朗詠を工夫しました。と言いますのも、親鸞聖人の著作である三帖和讃は七五調の四連で構成された「今様」の形であります。その制作の意図を窺いますに、琵琶の音にのせて語るにふさわしいものではないかと考えました。朗詠は簡単・素朴な旋律になっております。また、語りの部分もその旋律を崩したものです。

宜しく御聴聞賜りますようお願い致します。

合掌

愚凡釈と